

作成（2025 年度）

簡易版 TP（ティーチング・ポートフォリオ）

氏名	富岡 直人
所属機関名	生物地球学部 生物地球学科
職位	教授
在籍年	28 年

教育の責任

私は考古学を専門に研究しており、「考古学概論」「考古学概論Ⅱ（過年度生対象）」「欧米考古学」「環境考古学」「人類（地理）考古学基礎実習」「地理考古学実習」「野外博物館実習 C（地理考古学）」の授業、通信教育部の入学前教育では「日本の文化」を担当している。

特に 1・2 年時学生を対象とする「考古学概論」と「環境考古学」は、150 名近い学生が受講しており、幅広い知識が得られるように配慮している。

また、3・4 年次学生を対象とする「欧米考古学」「地理考古学実習」「野外博物館実習 C」では、考古学として高い専門性のある分析・調査方法を学ぶ機会を提供している。

さらに学生支援機構で、学生支援と国際交流に取り組んでいる。

教育の理念

私の教育理念は、1)実物に基づく様々な分析によって自然や社会を復元する人材の育成、2)英語の考古学・人類学用語の理解を通じ、国内はもちろん海外での調査も可能な人材の育成、3)留学生別科や留学生の教育の推進に学生支援機構長の立場であたる、が挙げられる。

「考古学概論」「考古学概論Ⅱ（過年度生対象）」「環境考古学」「人類考古学基礎実習」「地理考古学実習」では、遺跡を構成する遺物（土器・石器・動物遺存体等）や遺構（住居址・貝塚・墓跡等）から人間活動や自然環境の復元する意義と分析手法を教育する。

「欧米考古学」「人類学基礎実習」「地理考古学実習」では、英語圏での先端的な考古学・人類学の研究の展開を教育するとともに、積極的に専門英単語の教育も行い、英語を利用した国際的人材の育成に取り組む。

「野外博物館実習 C」では、国家資格である学芸員資格取得者として相応しい技能を有する研究者の要件を備えられるように教育も行う。

卒業研究Ⅰ・Ⅱでは、私自身と学生との対話は勿論、学生相互の交流と学び合い、教え合いの雰囲気作りに取り組むとともに、自己肯定感の醸成、他者尊重のマナーの修得に配慮している。特に卒論テーマは、自主的に決定する事を推奨し学生自身がアクティブに学ぶ経験を通して生涯を通じた問題意識を確立する事を尊重している。さらに、卒業研究では学生とともに行動し、博物館・資料館や野外での実物の調査を展開する姿勢を重視し、研究機関に協力を仰いで毎年ゼミ調査を実施している。

通信教育部の入学前教育の「日本の文化」では、日本語で授業を行っているものの、スライド資料では専門用語について英語での併記を行い、英語に堪能な留学生・日本人学生の理解の深化を狙った。

留学生別科生と留学生の教育や生活支援に学生支援機構長の立場より取り組むとともに、認定日本語学校の設置に取り組み、別科生の教育の充実と推進に尽力している。

教育の方法・方針

方針 1 およびその方法

1 年生対象の「考古学概論」と 2 年生対象の「考古学概論Ⅱ（過年度生対象）」では、実物（遺跡：遺物・遺構）理解の基礎を理解させる教育を行う。

2 年生対象の「環境考古学」では、実物の中でも特に動物遺存体・植物遺存体の分析から自然と社会を復元し、分析する方法を学ぶ。特に、水中考古学のような「考古学最後のフロンティア」と呼ばれる先端的な研究の取組みも実際の私自身の研究成果を紹介し、学生の興味の醸成に取り組んでいる。

2 年生対象の「人類考古学基礎実習」と 3 年生対象の「地理考古学実習」では、実物からデータを抽出し、人間活動や自然環境の復元をどのように行うか、実地に分析する手法を教育する。

3 年生対象の「野外博物館実習 C」では、実物資料を中心に復元品、複製品の製作・取扱い、ライティング・フレーミングを含めた写真撮影等の教育も行う。

4 年生対象の卒業研究Ⅰ・Ⅱでは、実物資料の調査分析を重視し、本学をはじめとする研究機関のマイクロスコープ、軟 X 線撮影装置、X 線回折分析装置、安定同位体比分析装置等の装置を用いたりしながら自然や社会の復元を体験的に学習し、論文を作成するプロセスも学ぶ。

方針 2) およびその方法

3 年生対象の「欧米考古学」では、2022 年に『入門欧米考古学』を同成社より出版し、欧米の中でも主に英語圏での先端的な考古学の研究成果を学ぶとともに、研究史上の人物の原語・英語表記や専門用語の英語表記、研究に関わる思想史や科学技術の発達を学び、国際的感覚の醸成に取り組んでいる。特に生物地球圏を研究してきた考古学・人類学のみならず、地学・生物学者も積極的に紹介し、幅広い学問分野の理解を促進するように工夫している。

2 年生対象の「人類学基礎実習」、3 年生対象の「地理考古学実習」では、英語圏での考古学・人類学の研究法を実際に体験するとともに、積極的に専門英単語の教育も行い、英語を利用した研究やコミュニケーションが出来る人材の育成に取り組んでいる。

方針 3) およびその方法

留学生別科や留学生の教育の推進について、全体に関わるものとして入学前教育の準備に取り組み、コンテンツについて議論を行った。また、留学生別科については、認定日本語学校の設置に向けて、WG 長として書類のとりまとめ等に尽力した。

また、2025 年度春より通信教育部における留学生に対する入学前教育として「日本文化」のコンテンツを提供し、諸外国の影響を採り入れ成立した日本文化のあり方を歴史学的に理解できるように教育を行った。特にヒンズー教の影響を色濃く残す日本仏教等の説明を「日本の文化」に採り入れているのは、今まで留学生や別科生を庭園や博物館への引率の経験を参考に構成した。

教育の成果

授業アンケートの結果より、文章作成や考古学の研究への理解・関心が高まったと判断されている。実習以外の各授業では学習内容についてシャトルカードやクリッカー意見や授業に関

する思いを集めており、授業への学生の反応を把握し、理解の不足が看取される部分についてはフィードバックに取り組んでいる。

今後の目標

水中考古学については、興味を持つ学生がいること、実際にダイビング技術を利用した海洋調査会社へゼミ生が就職したことから、この研究の展開を継続する。

シャトルカードの利用については、配布や回収に時間がかかることについて、受講生のほんの一部から苦情が出たので、電子的な方法での配布や回収を検討する。

根拠資料

『入門欧米考古学』（同成社：ISBN978-4-88621-890-2 C1021）

シラバス

授業アンケート

シャトルカード

授業資料

クリッカーの結果